

藤原松三郎先生と平山諦先生

<時代に生き、時代と格闘し、遺したこと>

静岡県掛川市教育センター 鈴木 武雄 (Takeo Suzuki)

Takegawa City Education Center. Sizuoka Pref.

1. 藤原松三郎先生について

藤原松三郎先生 (1881-1946) は第二次世界大戦前において日本の数学界を代表する数学者であり、また和漢数学史家 (*日本数学史, 中国数学史, 朝鮮数学史) としても最高の業績を遺されました。その上、東北大学にとって藤原先生の存在は非常に重要で、忘れることの出来ない存在です。それは後記する藤原先生の御経歴にありますように、1907 年 (明治 40) 12 月 21 日勅令で東北帝國大学創立。1911 (明治 44) 年 3 月 18 日東北帝國大学数学科が設置されたとき、最初から教授として 30 歳で就任され、61 歳で停年退職するまで御尽力をされたことから分かります。即ち、東北大学の学術研究及び教育の基礎を創り大きく発展させた最も大きな功労者のお一人です。藤原先生は 44 歳で帝國学士院会員に推挙されたことから学界での存在の大きさが分かります。藤原先生は 90 編の欧文論文があるようにその研究業績は国際的にも高く評価されていました。第二次世界大戦以前にこれだけ多くの学術論文を欧文で出され、国際学術会議 (*世界数学会議) にも二度も出席され学術講演をされた方は多くありません。

ところが、藤原先生が御逝去されたのが 1946 年 (昭和 21) という第二次世界大戦・敗戦直後の大混乱で苦難な時代でありましたから、その業績の大きさや東北大学及び日本の学界への貢献並びに功績の大きさに比べて十分に顕彰されることがありませんでした。

その業績を数学史分野だけに限定しても日本学士院編『明治前日本数学史』全 5 巻 (岩波書店, 1955-1960) は和算史を研究する上で最も重要であり基本的な文献です。この浩瀚で精緻な内容は現在でも他の類書の追隨を許さないほどです。本書の著者は表紙等に明示されていませんが元東北大学教授・帝國学士院会員藤原松三郎

先生であったことは周知のことです。ところが藤原先生没後60年も経ちますと、その業績や本書がいかなる状況下でなされてきたかは忘却されています。

特に『明治前日本数学史』以外に多くの論文及び随筆、講演録が、遺されています。それは「東北数学雑誌」「帝國学士院記事」などに掲載されていますが、特殊な雑誌であり一般の方々は見ることも読むこともできません。また論文掲載が1938年から1949年までであり、戦中戦後の出版及び流通上の困難な事情もありました。その上当時の紙質が劣悪なものがあり、劣化が著しく物理的にも亡失する可能性は高いものがあります。このような意味でも、『藤原松三郎先生数学史論文集』を編集・出版することは、学術的にも文化的にも学界及び社会にたいして大いに価値あることだと信じています。（*東北大学出版会より刊行が予定されています。）

2. 藤原松三郎先生の御経歴

藤原松三郎先生の御経歴を簡潔に記します。1881(明治14)年2月14日三重県津市南之瀬古町津五九四番地(原籍地)生まれ。1895(明治28)年津市養正小学校卒業。1899(明治32)年三重県津中学校卒業。1902(明治35)年6月第三高等学校卒業(*河合十太郎教授等に学ぶ)。1905(明治38)年7月東京帝国大学理科大学数学科卒業(*藤澤利喜太郎教授等に学び、卒業時恩賜の銀時計授与される)。1907(明治40)年10月第一高等学校教授に就任。1907(明治40)年9月ドイツ・フランスへ留学(*ローマでの第5回国際数学者会議へ出席)。1911(明治44)年4月東北帝国大学理科大学教授に就任(*林鶴一教授と共に初代教授)。1914(大正3)年理学博士の学位を授与される。1921(大正10)年3月欧米各国へ出張。1926(大正14)年6月帝國学士院会員。1936(昭和11)年4月欧州各国へ出張(*オスローでの第11回国際数学者会議へ日本学術研究会議の日本代表として出席。副会長の一人、全体講演の座長の一人として推される)。1940(昭和15)年10月満州国中華民国へ出張(*北京近代科学図書館訪問)。1941(昭和16)年8月満州国中華民国へ出張(*北京大学理学院で講演)。1942(昭和17)年3月停年退職。この間2度理学部長を務められています。1946(昭和21)年10月12日福島市にて御逝去。この間、多数の論文(*欧文約90編)を東北数学雑誌等に発表され、また『代数学：第1,2巻』(内田老鶴圃,1928-29 初版),『微分積分学：第1,2巻』(内田老鶴圃,1929-30 初版),『常微分方程式論』(岩波書店,1930),『行列及び行列式』(岩波全書,1934),『複素函数論：1,2,3,4,5,6,』(岩波講座,1932-33)『無限多変数ノ函数論：1,2』(岩波講座,1934)など高く評価されている名著を遺されています。尚、没後『日本数学史要』(宝文館,1952),

『西洋数学史』（宝文館,1956）などが出版されました。

3. 藤原先生と東北帝國大学理学部数学教室

この御経歴で明らかなように、藤原先生は東北帝國大学理科大学数学科創設時初代の教授として就任しました。その時の数学教室初代主任教授が著名な国際数学雑誌（*日本で最初の国際数学雑誌と言ってよいでしょう）である「東北数学雑誌」を創刊された林鶴一教授(1873-1935)です。草創期の教授は林鶴一先生と藤原松三郎先生のお二人でした。助教授は微分幾何学で著名な窪田忠彦先生お一人でした。助手が著名な数学史家となった小倉金之助博士でした。翌年掛谷宗一博士（*後東京大学教授、帝國学士院会員、統計数理研究所初代所長、掛谷の問題でも著名）が助教授として加わりました。

（*元東北大学教授佐々木重夫先生著『東北大学理学部数学教室の歴史』に林博士、藤原博士、掛谷博士、小倉博士の四人が一緒に写った写真があります。）藤原先生は30歳で東北大学教授となられ、61歳で停年退職されるまで東北大学を数学界の中心に育て上げられました。今日東北大学理学部数学科が世界の数学界で存在を確かにしているのも林鶴一博士、藤原松三郎博士、窪田忠彦博士、掛谷宗一博士等の非常に大きな貢献があったからです。藤原先生の御活躍は東北大学という範囲に止まらないで日本の学界を代表するものでした。それゆえ、44歳で帝國学士院会員に推挙され活躍されたのです。尚、藤原先生が二度に及び世界数学会議へ出席し講演をしたのも、その業績と学界での評価を表すものです。

藤原先生の数学方面の業績は欧文論文約90編になっています。解析学の諸分野を主として代数学及び幾何学の論文もあります。上記した『代数学：第1,2巻』（内田老鶴圃,1928-29 初版）、『微分積分学：第1,2巻』（内田老鶴圃,1929-30 初版）は非常に分厚い著作で長く各大学の教科書及び参考書として使われています。『常微分方程式論』（岩波書店,1930）は日本で最初の常微分方程式論の著書として専門家に知られています。『無限多変数ノ函数論：1,2』（岩波講座,1934）は当時最新の数学理論であったヒルベルト空間論に関する著作です。

4. 藤原先生による数学史（和漢数学史）研究の動機

藤原先生が数学史（和漢数学史）の研究を開始された動機は林鶴一博士の突然の御逝去によります。初代数学教室主任教授林鶴一博士は「東北数学雑誌」を私費で創刊し純粋数学に関する幾多の論文をものにしながらも、江戸時代における日本の

数学史研究（*和算史研究）に全力を挙げられました。それは合計二千頁を超える浩瀚な『和算研究集録』上下として出版され、和算史の研究史上で燦然と輝いています。また、現在東北大学附属図書館に所蔵されている歴大な狩野文庫、岡本文庫、林文庫、林集書など和算書の大蔵書群（*学士院所蔵和算書と並んで最大の蔵書群です。）は林鶴一博士の献身的な努力により収集されたものです。この林博士の偉大な業績と遺された貴重な文化遺産である大蔵書群を前にした藤原先生は、それまでの純粹数学研究から和漢数学史研究に没頭することになったのです。これらの経緯については藤原先生御自身が「林鶴一君を憶ふ」「林鶴一君の業績」「林鶴一博士小伝」「余の和算史研究」などで細述されています。藤原先生の遺された業績で著名な著作が岩波書店刊『明治前日本数学史』（全5巻）です。戦前日本の学界（帝國学士院）が総力を挙げて刊行を企図した『明治前科学史』における日本数学史の部分でもあります。現在及び将来においても『明治前日本数学史』（全5巻）は和算史を研究する上での拠であり、乗り越えなくてはならない巨大な壁でもあります。（*この『明治前日本数学史』（全5巻）の執筆経緯について、「余の和算史研究」の附記（*藤原先生の弟子であった元東北大学教授平山諦博士の記事）を御覧下さい。）

5. 藤原先生の遺された数学史論文

藤原先生の『明治前日本数学史』（全5巻）は、纏まりのある形で現在も出版され容易に入手し見ることができます。それに反して藤原先生の遺された和算史、中国数学史、朝鮮数学史に関する論文や随筆及び講演録など多数は、非常に重要であるにも関わらず、ほとんど読まれていません。それは各論文、随筆、講演録などが「東北数学雑誌」「帝國学士院記事」「文化」「日本中等教育数学学会雑誌」「科学史研究」などに掲載されたものであり、一般的に流布されたものではなく、また纏まった形（*論文集など）で刊行されていないからです。

ここに『藤原松三郎先生数学史論文集』を刊行する最大の意義があるのです。本書は今後数学史・科学史及び東洋文化史を研究する上で誰もが参考にする書物になるでしょう。また、藤原先生が御逝去されてから60年を記念するとともに、東北大学創立100年を記念した出版物になると秘かに思います。

6. 藤原先生による数学研究者の育成

藤原先生は数々の数学者を育成したことも非常に重要な貢献です。藤原先生のお

弟子さんで一般の方々にも知られた方ですと数学教育家として著名な遠山啓氏（*元東京工業大学教授、水道方式、量の理論は著名）でしょうか。元東北大学教授佐々木重夫先生著『東北大学理学部数学教室の歴史』のなかに藤原先生と学生服の遠山啓氏等と一緒に写った写真があります。戦前期においても東北大学は女子学生の入学を許可しています。藤原先生に学んだその一人が森本治枝さん（*森本治枝『ある女性数学者の回想』（九州大学出版会、1995））です。森本さんは女学校等で数学を教えた方です。『東北大学理学部数学教室の歴史』のなかに藤原先生と一緒に写った着物姿森本さんの写真があります。御主人は東北大学の助手であった数学者森本清吾博士（*後広島高等工業教授、『森本清吾論文集』（森本清吾論文刊行会編、1955）、本書の序文は小倉金之助博士です。）です。また、東北大学は外国人の入学を許可したことで画期的でした。藤原先生のお弟子さんの一人に中国人数学者陳建功教授がいます。陳教授は蘇歩青教授を浙江大学へ招き“陳蘇学派”を形成し中国近代数学の基を築きました。（*蘇歩青教授も東北大学に留学され、微分幾何学を学ばれました。）陳教授は日本語で岩波書店より高等数学叢書の一冊として『三角級数論』（1930）を出版しました。本書には藤原先生の序文があり、藤原先生の指導と推薦があります。陳教授の自序にある学友泉信一君とは、藤原先生の後継者であった元東北大学教授泉信一先生のことです。泉教授は実解析学で多くの業績があります。尚、数理経済学の分野（*角谷の不動点定理）でも世界的に有名な数学者角谷静夫教授（*アメリカ・ユール大学教授）も藤原先生のお弟子さんです。藤原先生の和算史研究の後継者は元東北大学教授平山諦先生です。

7. 藤原先生による『明治前日本数学史』の執筆状況と平山諦先生

さて、藤原先生による数学史研究の回顧記「余の和算史研究」にあります平山諦先生による附記は、『明治前日本数学史』の執筆における極めて困難な時代背景と藤原先生の苦闘と御家族の御協力並びに藤原先生と平山先生との御関係を物語っています。

「本文に述べられた如く、藤原松三郎先生の和算研究は林鶴一先生の歿後、昭和12年頃から始まった。昭和15年紀元2600年に際会し日本学士院の日本数学史の編纂を担当するようになってから、一切の余事を避け文字通り寝食も忘れて和算史の研究に精進した。準備も大体出来上り、昭和18年1月18日を期して‘自分には正月も盆もない’といって朝から書斎にとじこもり日本数学史の第一頁

の執筆を始めた。爾来約2年間に8000枚の原稿を書き上げたことは先生の非凡の努力を物語って余りあるものである。

昭和20年7月9日の空襲で広からぬ先生の屋敷に大型の焼夷弾4箇落下し、母屋と充分に離して建てた書斎に1箇ずつ命中した。どちらも全焼したが近隣には類焼しなかった。これにより先き先生は防空壕を2箇作り、書斎近くの方には、皮のトランクに入れた原稿を仕舞うことにした。しかし湿気と仕事に不便なため原稿はいつも書斎にあった。七月九日偶々疎開荷物を運ぶため田舎に行つて、夜七時過ぎに家に帰った。空襲が始まるや否や先生一家は防空壕に避難したとたんに焼夷弾に見舞われた。夢中で歩行困難な御夫人を肩にして半里余り台野原に避難した。

夜も白ら々とあけて台野原から帰途についた先生の心持ちはどうであつただろう。關孝和以来和算発達の有様が走馬燈の如く先生の頭に往来した。“自分は日本数学史を記憶で再び書き直す決心だつた”と後で私に談つた。書斎の原稿も大学の和算書も焼けたものと信じた先生の心に神が宿つたと云おうか、記憶が一斉に甦つたのである。

焼け跡にたどりついた先生は如何ばかり驚喜したであろう。原稿はチャンと防空壕に仕舞つてあつた。令息道太郎さんの御夫人道子さんの機転で、その日に限つて原稿を防空壕に仕舞つたのであつた。しかし調査に使つたノート類は一切焼いた。

間もなく先生は大学へかけつけ書庫の安全を見てはじめて安堵した。そこで私は原稿を運び出す打ち合わせをした。しばらくの間は息子道太郎さんが防空壕に泊まつて番をすることにし、その間に病気の御夫人と幼い孫を山形県の田舎に連れて行くことにした。7月12日山形に来てからは連日の雨で道太郎さんもうとう堪えられなくなつて防空壕を土で嚴重に塞いで山形に来た。

雨の止むのを待つて18日に仙台に原稿を取りに行つた。私は大学に寄つてから先生の防空壕を尋ねた所、先生は悄然として居られた。聞けば防空壕に地下水が滲透して箆箆の上に置いた原稿も危いとのことである。

10余貫の原稿をリックサックに詰め、両手に提げた私の姿を見送つた先生の眼には安堵の涙さへ輝くように見えた。かくして無事に原稿を山形の田舎に移すことが出来たが、先生は“これさえ助かれば何もいらぬ”と度々口にされた。

その年10月福島に移り、翌年6月には病床に横たわる身となつた。その間主

として‘総論’を書かれた。歴大なる日本数学史を簡潔にまとめ上げたもので、各編の巻頭に附するものである。そのうちに原稿の清書が出来上がると、先生は病床で推敲にとりかかった。7月頃までは起き上がって机に向かうこともあったが、8月になると床の上で文字を訂正する位であった。9月になると疲れた手から、いつの間にか原稿を落としてウトウトすることが多かった。かくして昭和20年10月12日（*昭和21年10月12日の誤記）死の数日前まで殆んど氣力もなくなるまで先生は原稿を手にしていった。

先生の病は肝臓癌でした。その年の3月頃から何となく食欲のすすまないことがありました。6月に医師の診察により肝臓癌と決定し、且つ死の時期まで予告されました。しかし御家族は一切このことを先生に知らせず、ひたすら日本数学史の推敲に激励されたことは誠に学界のため感謝に堪えません。この心情は必ず日本数学史に甦るでしょう。

先生は最後まで回復を信じつつ安らかに永眠致しました。

日本数学史の印刷になる見込みは殆どないものと先生は思っていました。そして只書き上げて自分の義務を果たしたいと常に云われていました。

和算史研究中先生の切望したものは“關孝和全集”以下和算家の全集出版であった。昭和13年頃にこれを計画し、刊本和算書目録と關孝和全集の印刷にとりかかった。關孝和全集を刊行して多くの利益を得て、これを基にして他の和算家の全集を刊行しようと目論んだのであった。所が科学研究費を出版に流用することは相成らぬとの文部省の通知に接し、中止のやむなきに至った。

我々は文部省教務局の出版を期待していた。そのうち日新書院から“關孝和全集”以下如何程でも出版するとの申込みがあったので、凡1萬頁の出版を約した。帝國学士院監修、藤原松三郎編のもとに出版届けを出し、關孝和全集の用紙は配給以外に特配まで貰った。空襲の危険を避けるため浜松市の印刷所開明堂に依頼して百余頁も校正刷が出来上がった時に、出版書肆の統合問題が起こった。結局日新書院は出版を放棄したので岩波書店に依頼した所心よく承諾された。しかしかれこれしているうちに折角組んだ版を印刷所は無断で解版してしまったので、この計画も頓挫して今日に至った。〔以下数行略。〕

8. 『明治前日本数学史』の評価

どのような業績や書籍でも後世において評価されます。どのような素晴らしい業

績や研究書であっても、加除修正の必要のない完璧な書籍などあり得ないでしょう。それはその時点における到達点であり、一里塚であり、通過点的な存在なのです。

『明治前日本数学史』の安易な評価を見かけることがあります。例えば、「間違いが多い。」などです。ところで、この『明治前日本数学史』が岩波書店から刊行されたのは、1955年(昭和30)から1960年(昭和35)のことです。藤原先生が御逝去されてから14年後のことです。しかも、平山先生は1949年(昭和24)から1952年(昭和27)まで結核で入院され生死の間を彷徨っていました。この間、平山先生の手許にあった『明治前日本数学史』の清書原稿は、誰かによって持ち出され刊行されたのです。従って、当然の事ながら『明治前日本数学史』は校正がまったく不十分です。そのために平山先生手沢本『明治前日本数学史』には、夥しい数の訂正が朱筆してあります。

故人の書籍を安易に低く評価することにより、はからずもその人の品位・品格が露呈されてしまいます。数学史家は歴史家です。その書籍が執筆された時代状況(*すなわち歴史)を感覚的にも捉える努力をすることではないでしょうか。その書籍が刊行された状況をも鋭く捉えることではないでしょうか。そうしたとき、あらためてその書籍の生命は甦るのだと思います。そこに歴史家の使命があると思います。

9. 人としての品位・品格

藤原先生の御経歴と業績をつぶさに見たとき、人としての品位・品格の高さを感じます。東北帝國大学開学、数学教室の創設・研究・育成・発展のために心血を注がれてきたことです。藤原先生が和漢数学史研究を開始したのは、1935年(昭和10)林鶴一名誉教授の突然の御逝去によります。林先生の和算史研究の遺産と龐大な和算書群を引き継ぐことを決意をされたのです。藤原先生はそれまでの純粹及び応用数学研究を中断してまで、和漢数学史研究に専心する決意をされたのです。それは藤原先生54歳のときです。東北帝國大学開学以来の教授として、藤原先生は林先生と共に数学教室を背負ってきた誇りと責任を示したのです。それは使命感とも言うべきものでしょうか。藤原先生は東京帝國大学を最優秀で卒業され、欧州に留学され若干30歳で東北帝國大学教授に就任されるという、超エリートです。良質の明治人の典型を感じます。その一端が、1941年(昭和16)岡潔博士が浪々の身で受理してくれるところもなく困っていた論文を藤原先生は東北数学雑誌に掲載するこ

とを速断即決したり、即座に帝國学士院記事への掲載を紹介することなどでも分かります。（*高瀬正仁著『評伝岡潔 花の章』（海鳴社 2006）pp.322-330. 高瀬氏の御教示によります。）ここにも藤原先生のお人柄として、苦難の中で努力している人（数学者岡潔）への誠実な対応を感じます。

10. 東北大学附属和算研究所の構想と挫折

1940年（昭和15）藤原先生は東北大学へ附属和算研究所の設立することを要望します。その和算研究所の規模は、

「総経費 36,500 円，臨時費 50,000 円，計 86,500 円。教授 2 人，助教授 3 人，助手 5 人。鉄筋コンクリート造，3 階建，90 坪。」

でした。（*東北大学名誉教授土倉保先生の調査によります。）思いの外大規模な研究所の構想だったわけです。

平山先生は 1930 年（昭和 5）東北大学を卒業して以来、中等学校などで勤務しつつ和算史研究をされていました。1941 年（昭和 16），和算研究所への就任予定所員として平山諦先生は東北大学理学部数学科講師になったと聞きました。しかし、和算研究所は実現されませんでした。他の農学部設置、抗酸菌病研究所（加齢医学研究所）など 7 施設の要求は実現されたものの、要求第二順位であった和算研究所のみ実現されませんでした。1941 年（昭和 16）12 月には真珠湾攻撃により日米開戦になっていた時代でした。戦時体制（軍事科学技術研究）に直接寄与しない和算研究所の実現は所詮無理だったのでしょうか。「もし」という言葉は歴史研究においてありませんが、このとき和算研究所が設置されていたならば、その後の日本における数学史研究状況は大きく変わっただろうと思わざるを得ません。

その後、平山先生は 1968 年（昭和 43）3 月 31 日定年退職される前日まで、東北大学理学部数学科講師でした。平山先生のそれまでの生活と退職後の研究及び著作活動を考えますと和算史研究が人生そのものだったと思います。平山先生の人生は、ある意味で和算史研究のおかれた実情と重なっていると言えましょうか。

<文献・註>

[1]掛谷宗一「藤原松三郎先生の思ひ出」『数学』（日本数学会、1948）第 1 巻第 2 号 pp.138-139. 尚本誌の表紙裏にも「藤原・掛谷両博士を偲ぶ」とあり写真と経歴及び業績が書かれている。*日本科学

史学会編『日本科学技術史体系史 12 [数理科学]』(第一法規,1969)pp.374-375.に再録されている。

[2]河田敬義編『日本の数学百年史：附録1 (1945年以前の欧文論文目録)』(上智大学数学教室,1993) pp.9-14.* 藤原先生の欧文数学論文約90編がリストアップされている。東北数学雑誌第42巻(1943) pp.133-138.には窪田忠彦教授によりリストアップされている。

[3]佐々木重夫著『東北大学理学部数学教室の歴史』(東北大学数学教室同窓会,1984) * 藤原先生を含む東北大学数学教室のメンバーの写真や業績及びエピソードが書かれている。

[4]窪田忠彦「故藤原、掛谷両博士の業績」『科学：第17号』(岩波書店, 1947年5月)pp.137-141.

[5]中村正弘「序にかえて／平山さんとの六十年」『平山諦博士長壽記念文集』(同刊行会,1996) * 中村正弘先生の序文の中に第二次世界大戦直後における東北大学数学教室の様子及び『明治前日本数学史』と平山先生のことが実に生き生きと書かれている。

[6]日本科学史学会編『科学史研究第11号』(岩波書店,1949) pp.79-86.* 本号へ掲載された藤原先生「余の和算史研究」は和算史研究の契機や研究と発見過程を生き生きと書かれている。

[7]日本科学史学会編『日本科学技術史体系史 12 [数理科学]』(第一法規,1969)pp.143-173.

[8]日本学士院編『明治前日本数学史』全5巻(岩波書店,1954-1960)

[9]日本学士院編『明治前日本数学史』全5巻(野間科学医学研究資料館,1979) * [8]複製版.

[10]日本学士院編『明治前日本数学史』全5巻(岩波書店,重版1994) * 附：正誤表

[11]日本の数学100年史編集委員会編『日本の数学100年史：上下』(岩波書店,1983) 上 pp.239-252.

上 pp.287-288.藤原先生の経歴及び業績や写真がある。* 草創期の東北大学数学教室と日本数学界の状況が書かれています。特に、東北大学数学教室が、『東北数学雑誌』創刊や林教授、藤原教授、窪田助教授等(教官)陣の研究への情熱により日本数学界をリードし、多数の人材を輩出した様子が書かれている。

[12]平山諦「藤原松三郎先生の数学史研究の業績」『基礎科学』(弘文堂,1948)第2巻第1号.pp.225-233.

藤原松三郎先生と平山諦先生との関連年表

2006.8.25. 於：京大・数理研

西暦(日本年)	藤原松三郎 先生関係	平山諦 先生関係	事件史, 政治経済史
1881 (明治14)	・2月14日三重県津市瀬古町津594番地で誕生。		・1889年2月. 帝国憲法公布 ※1894年8月1日. 日清戦争
1895 (明治28)	・津市養正小学校卒業		・義和団事件
1900 (明治33)			・日英同盟調印
1902 (明治35)	・第三高等学校卒業(*河合十太郎教授等に学ぶ)		
1904 (明治37)		・8月13日千葉県成田で誕生。	※2月10日. 日露戦争開戦 ※9月. 日露講和条約調印
1905 (明治38)	・東京帝国大学理科大学数学科卒業(*藤澤利喜太郎教授等に学ぶ。卒業時恩賜の銀時計を授与される)		
1907 (明治40)	・第一高等学校教授に就任		・株式相場暴落(戦後恐慌)
" "	・ドイツ及びフランスへ留学(*ローマでの第5回国際数学者会議へ出席)		
" "	※6月22日東北帝国大学創立(勅令)		・韓国併合
1911 (明治44)	○東北帝国大学理科大学教授に就任(*林鶴一教授と初代教授)※東北数学雑誌創刊		・大逆事件の被告処刑
1914 (大正3)	・理学博士の学位を授与される		※第一次世界大戦勃発
" "	※東北帝国大学附属臨時理化学研究所設置→1919 鉄鋼研究所→1922 金属材料研究所		・株式相場暴騰(大戦景気)
1921 (大正10)	・3月. 欧米各国へ出張		・1918年米価暴騰. 大戦終結.
1922 (大正11)		・私立成田中学校卒業	・原敬刺殺, 日英同盟廃棄
1923 (大正12)			・対支文化事業特別会計法
" "			・関東大震災
1924 (大正13)	・7月. 理学部長就任→1926.7.まで		
1925 (大正14)	・6月. 帝國学士院会員に推挙される		
1927 (昭和2)		・第二高等学校卒業	
" "		・東北帝国大学理学部数学科入学	
1928 (昭和3)	・『代数学』刊行		・関東軍が張作霖爆殺。
" "			・治安維持法公布施行。
1929 (昭和4)	・『微積分学』刊行. ※林鶴一教授退職。		・国際連盟発足
1930 (昭和5)	・『常微分方程式論』刊行	・東北帝国大学卒業	
1931 (昭和6)			・満州事変始まる
1932 (昭和7)	・『複素関数論』刊行		・5・15事件. 満州国建国宣言
1933 (昭和8)		・「劍持先生の二、三の著作について」	
1934 (昭和9)	・『行列及び行列式』刊行		・満州国帝制(溥儀)
" "	・『無限多変数ノ関数論』刊行		
1935 (昭和10)	※10月2日松江で林鶴一先生御逝去		
" "	※電気通信研究所設置		
1936 (昭和11)	・7月. 欧州各国へ出張(*オスローでの第10回国際数学者会議へ日本学術研究会議の代表として出席: 副会長. 全体講演座長に)		・2・26事件
" "	※『林鶴一和算研究集録』刊行		
1937 (昭和12)			※日中戦争はじまる
1938 (昭和13)	・第二十回総会ニ於ケル講演(支那数学)		・国家総動員法公布施行
" "	・『関孝和全集』『大成算経』出版計画		・荒木文相. 科学振興調査会
1939 (昭和14)	・「A problem of Diophantine approximations in the old Japanese Mathematics」, P.I.A.		※5月. ノモンハン事件
" "	・「The method of successive approximation in		※9月. 英仏. 対独宣戦布告

	the old Japanese Mathematics],P.I.A.		
" "	・「和算史ノ研究(和算ト支那数学ノ交渉)」 T.M.J.		
" "	・「和算史ノ研究, II (建部賢弘ノ累約術)」 T.M.J.		
" "	・4月理学部長就任→1940.10.まで		
" "	※農学研究所設置		
1940 (昭和15)	・12月14日.満州国中華民国へ出張(*北京近代科学図書館を訪問)		・9月.日本軍、仏印進駐 ・10月.大政翼賛会発足 ・11月.紀元2600年祝賀
" "	・「和算史ノ研究, III, IV, V, VI」T.M.J.		
" "	・「支那数学史ノ研究, I, II, III」T.M.J.		
1941 (昭和16)	・11月9日.満州国中華民国へ出張(*北京大学理学院で講演)	○東北帝国大学理学部数学科講師に就任	※12.8.日本対米英宣戦布告
" "	・「支那数学史ノ研究, IV」		
" "	・「和算史ノ研究, VII」		
" "	※選鉱製鉄, 抗酸菌病, 科学計測, 航空医学, 高速力学, 非水溶液化学, 硝子の各研究所設置. 和算軒研究所構想。		
1942 (昭和17)	・1月『明治前日本数学史』執筆開始 ○3月.東北帝国大学を定年退職		・1月.日本軍、マニラ占領. ・2月.シンガポール陥落 ・3月.日本軍、ジャワ島上陸
" "	・「和算史ノ研究, VII, IX, X, XI」		
" "	・「和算に現われたる我が国民の帰納力」		
" "	・『関孝和全集』刊行努力(日新書院→岩波)		・10月.ガダルカナル島攻防
1943 (昭和18)	・「ケール全書との蘭訳本に就いて」 ・科学技術審議会第一部会出席?		・1月.ニューギニアで軍全滅 ・4月.山本五十六戦死
" "	・「関孝和は果たして元禄庚午暦を作ったか」		
1944 (昭和19)	・「支那数学史ノ研究, V」P.I.A.		・6月.米軍サイパン上陸
" "	・「和算史ノ研究, XII」P.I.A.		・7月.米軍グアム上陸
1945 (昭和20)	・7月.山形県東村山郡へ疎開	・7月10日.山形県橘山村風間へ疎開	・7月9日.仙台北空襲 ※8月15日敗戦
" "	・9月.東北帝国大学卒業授与式で記念講演		
" "	・「承清準規の著者について」		
" "	・「算組とうんすんかるた」		
1946 (昭和21)	・5.31「余の和算史研究」脱稿		・4月.GHQ軍国主義者公職追放
" "	・6.21「本多利明の常陸遊覧不問物語」稿		・5月.樺東軍事裁判
" "	○10月12日福島市で御逝去(*65歳)		・11月.日本国憲法公布
" "	・「和算史ノ研究, XIII」		
1948 (昭和23)		・「藤原松三郎先生の数学史研究の業績」	
1949 (昭和24)	・『日本数学史要』刊行(序:泉信一, 平山謙)	・『明治前日本数学史』原稿完成.結核で入院.1952年春退院。	※1950年6月.朝鮮戦争勃発
" "		・『円周率の歴史』刊行	
1955 (昭和30)	・『明治前日本数学史』第1巻刊行	・『東西数学物語』刊行	
1956 (昭和31)	・『明治前日本数学史』第2巻刊行		
1957 (昭和32)	・『明治前日本数学史』第3巻刊行		
1959 (昭和34)	・『明治前日本数学史』第4巻刊行	・『関孝和』刊行	
1960 (昭和35)	・『明治前日本数学史』第5巻刊行	・『増補日本数学史』補訂刊行	・新日米安全保障条約締結
1961 (昭和36)		・『和算の歴史』出版	
1962 (昭和37)		・孔版目録『狩野文庫の和算天文暦書』	
1963 (昭和38)		・『関孝和全集』本田益夫と横山社長企画	
1966 (昭和41)		・『安島直円全集』『会田算左衛門安明』	※ヴェトナム戦争
1968 (昭和43)		○東北大学を定年退職.孔版『養神神算』	・大学紛争
1974 (昭和49)		・『関孝和全集』,『増補改訂一関孝和』	
1982 (昭和57)		・静岡県磐田郡豊田町へ転居(*78歳)	
1987 (昭和62)		・『松永良弼』刊行	
1993 (平成5)		・『和算の誕生』刊行(*89歳)	
1998 (平成10)		・6月22日.静岡県豊田町で御逝去(*94歳)	